

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 5月24日現在

機関番号：17102

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21720008

研究課題名（和文） アリストテレス『形而上学』中核諸巻における実体論および現実態論の研究

研究課題名（英文） A Study on Aristotle's Theory of Substance and Actuality in the Central Books of the *Metaphysics*

研究代表者

岩田 圭一（IWATA KEIICHI）

九州大学・大学院人文科学研究院・准教授

研究者番号：00386509

研究成果の概要（和文）：

本研究は、アリストテレス『形而上学』中核諸巻（ZHΘ巻）における実体論および現実態論の中から、とくに「普遍」の概念に関する問題と、「デュナミス（能力／可能性／可能態）」の概念に関する問題を取り上げ、それらの概念の意義を明らかにすることを試みた。「普遍」については、『形而上学』Z巻第13-16章における主張、すなわち、「普遍は〈実体〉ではない」という主張をどのように理解するべきか、とくに、形相——〈実体〉として認められる——は普遍であるという見方と、その主張とが矛盾していないのかどうかという問題について考察した。その際、普遍的な形相が個別的な形相なしには存在しないことに着目して、その主張が個別的な形相を語る文脈の中で行われていることが重要であると解した。「デュナミス」については、能力の存在を否定するメガラ派の見解の批判において、「可能性」の概念が明確にされ、そこからさらに、「質料」にも適用される「可能態」の概念が明確にされる道筋を明らかにし、また、「可能態」としての「質料」についても、アリストテレスの自然学的な考察を手がかりに、理解を深めることができた。

研究成果の概要（英文）：

This study dealt especially with the problems of the notions of universal and of *dunamis* (capacity / possibility / potentiality) in Aristotle's theory of substance and actuality in the central books (ZHΘ) of the *Metaphysics*, and attempted to clarify the significance of these notions. As regards the notion of universal, I considered how the claim in the *Metaphysics* Z 13-16 that no universal is a substance should be understood, and especially whether or not the claim was consistent with Aristotle's view that the form, which is regarded as a substance, is a universal. I interpreted that it was important that the claim was made in the context of Aristotle's consideration of the particular form, thinking that the universal form did not exist without the particular form. As regards the notion of *dunamis*, I made clear that the notion of possibility was made explicit in Aristotle's criticism of the view of the Megarians who denied the existence of capacity, and that the notion of potentiality, which was also applied to matter, was clarified. Then, I obtained a further understanding of matter as potentiality by reference to Aristotle's natural philosophy.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
総計	1,400,000	420,000	1,820,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・倫理学

キーワード：アリストテレス、形而上学、実体論、普遍、形相、能力、可能態、質料

1. 研究開始当初の背景

アリストテレス『形而上学』中核諸巻（Z H Θ 巻）における実体論の研究は、「実体（*ousia*）」や「形相（*eidos*）」といった中心的な諸概念の解釈をめぐる論争という形で進展してきた。とくに、形相は個別的であるか、普遍的であるかという問題については論争が多く、実体論の研究において避けて通ることのできない問題となっている。実体論については世界的に、数多くの研究成果が出されているが、近年の傾向としてはΘ巻における「可能態（*dunamis*）－現実態（*energeia*）」の対概念を主題とする研究成果が増えている。もちろん、Z H 巻における「実体」、「形相」、「本質（*to ti ên einai*）」などの主要な諸概念にかかわる研究も、引き続き行われている。

本研究の開始に至るまでの間、こうした世界的な研究動向に注意しながら、『形而上学』Z H 巻における実体論の諸問題について研究し、さらにΘ巻における「可能態－現実態」論についても研究を進めてきた。具体的には、H巻第2章における「ある」の用法の問題、『自然学』第1巻と『形而上学』Z巻における生成論と「述語づけ」の問題、『自然学』第3巻第1章における「運動」の定義における「可能的にあるもの（*dunamei on*）」の問題、H巻第6章における質料（*hylê*）と形相からなる結合体の一性の問題、Z巻第10－11章の定義論における「質料」の問題、Z巻第17章における原因としての「形相」の問題、『カテゴリー論』第1－5章における「実体」と「属性」の問題、Z巻第1章における「第一義的にあるもの」としての「実体」の問題、Z巻第4－6章における「本質」の問題、Θ巻第1章と第6章における「能力」と「可能態」の問題、Θ巻第8章前半における「現実態」と目的論の問題、『魂論』第2巻第1－2章における「魂」の定義の問題などについて研究してきた。しかし、実体論の中には、これまでの研究で取り上げていない諸問題も多く存在する。そこで本研究において、それらの諸問題の中から、「普遍」に関する問題、「形相」のあり方に関する問題、「可能態」と関係する「能力」および「可能性」の概念に関する問題を取り上げ、研究することにした。

2. 研究の目的

西洋古代哲学における「存在」の問題は、パルメニデスによる問題化に端を発し、プラトンによるソクラテス哲学の形而上学的展

開によって哲学上の中心課題となった。アリストテレスはこの課題を引き受け、プラトンのイデア論に反対しつつ「存在」についての独自の学、すなわち、「第一哲学」を打ち立てた。本研究では、アリストテレスの「第一哲学」、その中でも感覚的事物の存在が主題とされる『形而上学』中核諸巻（Z H Θ 巻）の実体論を研究対象として取り上げ、その解釈を通じてアリストテレスの形而上学的思考様式を正確に把握することを目指す。そのためには、『形而上学』中核諸巻の実体論に見られる主要な諸概念の多義的な用法をそのつどの文脈に即して明らかにし、中核諸巻の実体論に一つの明確な解釈を与える必要がある。

本研究で扱うテキストは、これまでの研究において十分に論じていなかったテキスト（Z巻第13－16章、H巻第4－5章、Θ巻第2－5章）である。これらのテキストの解釈を通じて、「普遍」に関する問題、「形相」のあり方に関する問題、「能力」および「可能性」の概念に関する問題について考察し、実体論におけるそれらの諸概念の意義を明らかにする。また、中核諸巻の実体論の全体を把握することも本研究にとって重要なことであるので、これまでの研究で扱ったことのあるテキストの再検討も行うことにする。

3. 研究の方法

本研究の目的は、『形而上学』中核諸巻の実体論に一つの明確な解釈を与え、アリストテレスの形而上学的思考様式を正確に把握することである。この目的を達成するには、これまでの研究で扱ったテキスト（『形而上学』中核諸巻や『カテゴリー論』、『自然学』、『魂論』の関連箇所）について再検討するとともに、新たに扱うテキスト（『形而上学』Z巻第13－16章、H巻第4－5章、Θ巻第2－5章）について丹念な読解と緻密な解釈を行う必要がある。テキストの再検討にせよ、新たな読解と解釈にせよ、多数の研究文献の参照が不可欠であることは言うまでもない。研究書としてまとまっている文献については、部分的に読むのではなく、その著者の試みの全体を把握した上でその研究書に見られる解釈の是非を検討する。さまざまな解釈を検討し、批判的に摂取することによって、独自のテキスト解釈を提示することを試みる。「普遍」に関する問題、「形相」のあり方に関する問題については、これまでの研究成果が大いに役立つと考えられるので、その成

果を踏まえて、多くの研究文献を参照しつつ、テキストの読解と解釈に取り組むことにする。「能力」および「可能性」に関する問題については、近年充実してきている「可能態—現実態」論に関する研究文献にあたって、それらの概念についての理解を深めるとともに、「可能態」としての「質料」について、アリストテレスの自然学的な論考を参照しながら考えることにする。

4. 研究成果

すでに述べたように、本研究で新たに取り上げるテキストは、『形而上学』Z巻第13—16章、H巻第4—5章、Θ巻第2—5章である。Z巻第13—16章は、「〈実体〉とは何か」というアリストテレスの〈実体〉探究——〈実体〉は結局のところ本質ないし形相であるとされる——において、普遍が〈実体〉ではないことを明らかにする部分である。プラトン主義者の見解では、例えば個々の人間が存在するのは普遍としての人間が存在するからであるというように、普遍は個物に対して存在論的に優位に立つものとされる。アリストテレスはそのような普遍を、自身の〈実体〉探究における〈実体〉の一候補として挙げ、Z巻第13—16章において考察している。このテキストは、アリストテレス自身の見解とプラトン主義者の見解とがはっきりと見分けられない難解なテキストである。そこで、諸注釈や主要な研究書を参照しながら緻密な読解を行った。

この難解なZ巻第13—16章に関する研究は、2009年度に行い、とくに、そこに見られるアイデア論批判の意義を明らかにした。Z巻第13章における〈実体〉の個別性という主張は、アリストテレス自身がその章の末尾で指摘するように、〈実体〉の定義不可能性という問題を生じさせる。Z巻第14章では、エイダス——プラトン主義者たちが認めるアイデア——が類と種差——これらもアイデアとみなされる——からなることの不都合が示されるが、本研究では、このアイデア論批判が〈実体〉の定義不可能性の問題と無関係ではないことに注目した。そして、エイダスが定義可能であるために満たすべき条件である複合性——類と種差からなるという——が否定されることによって、エイダスの定義不可能性が暗黙のうちに示され、それが個別の形相としての〈実体〉の定義不可能性の理解に役立てられていることを明らかにした。Z巻第15章では、プラトン主義者の語る個物としてのエイダスの定義不可能性が明示的に示されているが、ここでも、アリストテレス自身の語る個別の形相の定義不可能性を理解させるという目的があつてエイダスの定義不可能性が示されているのだと解釈した。ところで、アリストテレスはZ

巻第15章において普遍的な形相の存在も認めているが、この一連の章では基本的に、個別の形相が〈実体〉であり、普遍的な形相が〈実体〉として言及されるのは派生的な意味においてであると解釈した。Z巻第13章より前の章では、〈実体〉性の基準——何かが〈実体〉であるための基準——として定義可能性が考えられているが、Z巻第13—16章においては、その基準は背景に退き、派生的な意味で言及される〈実体〉に認められることになったのだと解釈した。

なお、2009年度は、これまでに扱った『形而上学』Z巻のテキストの再検討も行い、個別の実体が離れて存在することの意味、そして形相が説明方式において離れて存在することの意味について考察した。その結果、個別の実体の離在可能性は、特定の属性から離在可能ということであつて、すべての属性から離在しているとか離在可能であるということではないことが明らかになり、個別の実体が現実にはさまざまな属性をもって存在していることが確認された。

次の年度、2010年度は、Θ巻第2—5章を取り上げた。Θ巻は、ZH巻における〈実体〉探究に続いて「可能態—現実態」の対概念そのものが取り上げられる箇所である。問題は、Θ巻第1—5章というΘ巻の半分が「能力」としての「デュナミス」についての考察にあてられていることである。本研究では、Θ巻第2—5章のテキストの読解を通じて、「能力」としての「デュナミス」について考察が行われていることの意味を明らかにした。まず、これまでに扱ったことのあるΘ巻第1章も含めて、Θ巻第1章から第3章の途中までを取り上げ、アリストテレスが「能動的能力」をどのようなものとして理解しているかを明らかにした。アリストテレスはこれらの章において、技術的な知識を典型とする能動的能力が「デュナミス」の第一の用法であるとして、これを模範的な例としながら、「能力」としての「デュナミス」について独自の説明を展開している。本研究では、アリストテレスの論述に即して、第1章から順に取り上げて、考察を行った。第1章に関しては、とくに「能動的能力」の規定——「他のものうちにある、あるいは他のものとしての限りにおける〔自分自身のうちにある〕、変化の原理」——における「他のもの」という表現の意味について考察した。第2章に関しては、「能動的能力」が二つの種類、すなわち、理性的能力と非理性的能力とに分けられる論述を詳しく見て、理性的能力としての技術的な知識が説明方式として存在するとされることについて、Z巻第7章の論述を参照することによって確認した。第3章に関しては、能力というものの存在を否定するメガラ派の見解に対してアリストテレスが提示して

いる反論を取り上げ、四つの反論のうちの最初の三つを詳しく見ることによって、アリストテレスが能動的能力を、当該の能動的能力の所有者の本質的属性であると考えていることを確認し、その哲学的な意義について考察を行った。

なお、2010年度は、アリストテレスの実体論が全体としてその構想のうちにあるとされる、アリストテレスの存在論の構想——〈あるもの〉の学の構想——についても考察を行った。具体的には、『形而上学』Γ巻、E巻における〈あるもの〉の学の構想と〈あるもの〉の四つの意味の区別についての考察から始めて、Δ巻第7章に見られる「付帯的に〈あるもの〉」についての考察、そしてZ巻における〈実体〉探究の再考を行った。

最終年度の2011年度は、予備的な作業として、『形而上学』Θ巻第8章後半における現実態優先論——「いっそう厳密な意味で」の優先性についての議論——に関するテキストを読解することによって、常に現実的であって可能的にあることのない永遠的なものについての見解が、中核諸巻の実体論の範囲を超えるものであることを確認した。中核諸巻の実体論における「現実態」概念の意義を見出すには、むしろ、「可能性」および「可能態」の概念について理解を深めることが重要であるので、『形而上学』Θ巻第3章におけるメガラ派批判の意義について、その批判の全体を取り上げて、考察を行うことにした。考察の結果、メガラ派が否定する能力——発揮されていない能力——の存在が確保され、そこから、「可能性」の概念が明確に規定されるという議論の道筋が明らかになるとともに、「可能性」の規定が「不可能性」の概念に基づいていること、そして不可能なものが確かに存在するとアリストテレスが信じていたことが明確になった。

また、中核諸巻の実体論における「可能態」の概念をより明確にするために、「可能態」が適用される「質料」について、『形而上学』H巻第4-5章およびΘ巻第7章のテキストを取り上げて、考察を行った。まず、H巻において質料に対して「実体」という語が適用されていることの意味を明らかにした。その場合の「実体」の用法は、動植物、動植物の諸部分、四元素などに適用される一般的な用法であり、アリストテレスの用法における「実体」や「〈実体〉」とは区別されるべきであることが明らかになった。次に、質料の階層に関するアリストテレスの見解について、粘液という質料が下位の脂っぽいものや甘いものからなり、これらがさらに下位の第一のものからなるという例を手がかりにして考察し、第一のものがいわゆる第一質料ではなく四元素のいずれかであることを確認した。さらに、H巻第5章における質料の円環

的な構造についての見解、そしてΘ巻第7章における質料の階層の説明とそこでの「可能態」の用法を見ることによって、「質料」に適用される「可能態」が「可能性」よりも制限的な用法の概念であることを明らかにした。この制限的な用法が「可能態」の厳密な用法なのであり、この用法における「可能態」との関係において「現実態」としての「形相」が理解されるべきであることが明らかになった。

本研究で取り上げた問題のうち、「普遍」の問題は、世界的に見て、盛んに論じられてきた問題である。本研究は研究者たちの研究を踏まえながらも、独自の視点で、個別的な形相と普遍的な形相との関係について考察しており、その意味で有意義な研究であったと考えている。「能力」、「可能性」、「可能態」については、近年の研究で注目され、よく研究されるようになってきており、本研究はそうした研究に影響を受けながら、テキストに基づく研究を行った。国内では、「能力」、「可能性」、「可能態」に注目した研究はまだ少ないように思われる。この点で、本研究の成果は重要なものであると考えている。

今後の研究の展望としては、これまで実体論という枠の中で考えてきた存在の問題を、アリストテレスの存在論というより広い視野から取り上げ、これまでに研究してきた実体論の意義を明らかにすることを考えている。とくに、「本質」と「現実態」の概念に注目し、感覚的事物の存在の原因としての形相がそれらの概念によって捉えられることの哲学的意義を明らかにすることにしたい。また、存在の問題が認識の問題とどのようにつながっているかについても考察することにしたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計6件)

①岩田圭一「質料の階層と「可能態」の概念——アリストテレス『形而上学』H巻第四—五章およびΘ巻第七章の解釈——」、九州大学大学院人文科学研究院『哲学年報』第71輯、pp.41-74、2012.3(査読無)

②岩田圭一「アリストテレスのメガラ派批判と「可能性」の概念」、九州大学哲学会『哲学論文集』47号、pp.1-28、2011.10(査読有)

③岩田圭一「アリストテレス『形而上学』Θ巻第一—三章における能動的能力の説明」、九州大学大学院人文科学研究院『哲学年報』第70輯、pp.75-97、2011.3(査読無)

④岩田圭一「アリストテレスの存在論における〈あるもの〉の多様な意味」、手川誠士郎先生古稀記念論文集編集委員会『存在の意味

への探求——手川誠士郎先生古稀記念論文集——』、pp. 163-181、2011. 3 (査読無)

⑤岩田圭一「類とエイドス——アリストテレスの実体論におけるアイデア論批判の意義——」、九州大学大学院人文科学研究院『哲学年報』第69輯、pp. 41-82、2010. 3 (査読無)

⑥岩田圭一「実体と形相——アリストテレスの実体論における離在可能性の問題——」、西日本哲学会『西日本哲学年報』17号、pp. 1-19、2009. 10 (査読有)

〔学会発表〕(計1件)

①岩田圭一「能力と活動——アリストテレス『形而上学』Θ巻におけるメガラ派批判の意義——」、九州大学哲学会、2010. 09. 25、九州大学箱崎キャンパス (査読無)

〔受賞〕(計1件)

①西日本哲学会第2回若手奨励賞受賞(2010. 12、上記〔雑誌論文〕⑥による)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岩田 圭一 (IWATA KEIICHI)
九州大学・大学院人文科学研究院・准教授
研究者番号：00386509

(2) 研究分担者

なし ()
研究者番号：

(3) 連携研究者

なし ()
研究者番号：